

第五回

琉球・中国交渉史に  
関するシンポジウム

論文集



生田 滋氏



李 国荣氏



方 裕謹氏



吳 元豊氏



朱 淑媛氏



田名 真之氏



沖縄県公文書館前にて



## 第五回シンポジウムの開催にあたって

沖縄県教育委員会教育長 安室 肇

「第五回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム」の開催にあたり、ごあいさつを申し上げます。

本シンポジウムは、一九九一年三月に、沖縄県と中国との間で調印された「清代の檔案マイクロフィルムの相互交換に関する中国第一歴史檔案館と日本国沖縄県教育委員会との覚書」に基づいて開催されてきたもので、第一回の調印締結から今日までの八年間に、沖縄と北京で交互に四回のシンポジウムが開催されました。昨年の十二月に、これまでの「覚書」は「日本国沖縄県教育委員会と中国第一歴史檔案館との琉中歴史関係学術交流に関する協議書」と改められ、調印がなされました。本日のシンポジウムは、この新しい「協議書」に基づく最初のシンポジウムとなります。

本日は、日本側から沖縄県歴代宝案編集委員の皆様をはじめ多数の研究者の参加をいただき、大東文化大学の生田滋教授と那覇市歴史資料室の田名真之室長が研究発表を行います。また中国側からは、中国第一歴史檔案館副館長の楊継波先生をはじめ、江西省檔案局の呉頤軒先生など、各地の檔案局の研究者十二名の参加をいただき、中国第一歴史檔案館の呉元豊先生、李国栄先生、方裕謹先生、朱淑媛先生の研究発表があると伺っております。この機会にじっくりと討論を重ねられ、多大の成果を収められますよう祈念しております。

さて、ご承知のとおり、日本と中国はこれまで隣国として長い友好の歴史を持っています。特に我が沖縄県の場合、一三七二年に琉球国中山王察度が洪武帝の招諭を受け入れて中国に進貢してから一八七九年の廃藩置県に至るまで、五百年にわたる国家間の正式な通交の歴史があります。この間、琉球は中国との冊封・進貢関係をとおし、中国の高度に発達した文化を取り入れ、独自の歴史を築き上げてまいりました。

こうした琉球と中国の交渉史の研究に关しましては、過去四回にわたって開催されました本シンポジウムの成果はもとより、日・中の多くの研究者の努力によりまして、その全容が次第に明らかにされつつあります。このことは、近年の『歴代宝案』校訂本、訳注本、『清代中琉関係档案選編』『同統編』『同三編』などの相次ぐ刊行により基礎資料が身近なものになったことと、決して無関係ではありません。しかしながら、交渉史の細部につきましては、必ずしも十分に研究がなされているとは言えない面もあります。本シンポジウムにおいて、日・中両国の研究者が一堂に会し、それぞれのご専門の立場から琉球と中国の交渉史について共通理解を深められることは、両国の学術交流を促進する上で画期的なことであり、今後の交渉史の研究にとつても寄与するところは大きなものがあると期待しています。

最後になりましたが、本日の研究発表をなされる先生方、ならびにシンポジウムに参加されました皆様のますますのご活躍を祈念いたしまして、開催のあいさついたします。

一九九九年三月六日